

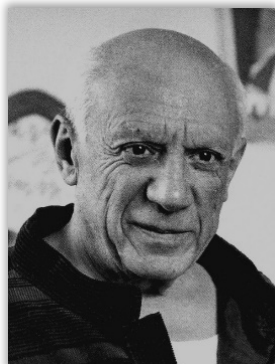
## モデルニスモの街

～ バルセロナに集まった芸術家たち ～  
ダリ、ミロ、そしてピカソ

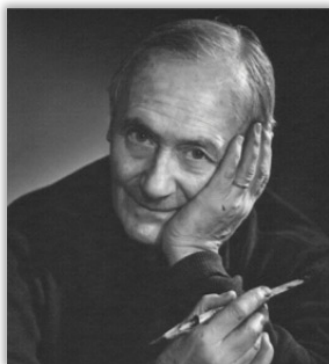


バルセロナは、街が大きく、観光名所も点在していて、地下鉄や徒歩より観光バスやタクシーを利用した方が便利です。タクシーに乗ると、ところどころにモデルニスモの建築物があり、目に入ってきます。モデルニスモ建築は色調が茶褐色のものが多く、バルセロナの街並みに馴染んでいるような気がします。その中でもサグラダ・ファミリア贖罪聖堂は圧巻ですよね。私が初めてバルセロナを訪れたのは1990年、サグラダ・ファミリア贖罪聖堂はまだまだ工事現場のようでした。ゆえに、その成長ぶりには驚かされます。2026年の完成を目標に建築が進められていますが、期限を決めて無理に完成させるより、“完成した時が完成”が良いのではないのでしょうか。私は、何百年かかっても良いと思っています。ミラノのドゥオーモも、世界遺産のケルンの大聖堂も、数百年の歳月を経て完成しているのですから……。次世代への申し送り事項として、気長に取り組んでほしいですね。完成したらお祭りが終わってしまうような感じがして、なんだか寂しい気がします。

さて、バルセロナというと、カタルーニャ地方で興った芸術運動「モデルニスモ」を代表する芸術家が多いことで知られていて、アントニ・ガウディ（1852-1926）やルイス・ドメネク・イ・モンタネル（1849-1922）などの世界遺産の建物群に関心が向きがちですが、このモデルニスモの影響を受けたのは、建築家だけではありません。実は、多くの画家たちも影響を受けているのです。その代表格が、パブロ・ピカソ（1881-1973）、ジョアン・ミロ（1893-1983）、サルバドール・ダリ（1904-1989）です。



パブロ・ピカソ



ジョアン・ミロ



サルバドール・ダリ

ダリは『すべてがわかる世界遺産大事典<下>』にもあるように、ガウディ建築を「五感の建築」と誉め称えるほどで、モデルニスモに心酔しています。しかも、このカタルーニャ地方出身でもあります。また、ミロはバルセロナ出身でモデルニスモの発展を目の当たりにし、ピカソはモデルニスモが隆盛を極めた20世紀初頭に多感な時期をバルセロナで過ごしています。その後、ダリとミロは「シュールレアリスム」へと進み、ピカソは、ここで吸収した「前衛芸術」を、その後、見事にパリで開花させます。

そして今回、私がこの3人の中で最も注目したのは、ピカソです。学生時代にアカデミックな絵ばかり描いていた（というより、描かされていたのかもしれませんが……）ピカソにとって、モデルニスモは斬新で解放感な溢れ、過去の束縛から解放されたのでしょう。ピカソの人生感に大きな影響を与えたことは間違いのないと思います。ピカソはパリに居を移し、青の時代、キュビズムの時代、シュールレアリスムの時代と何度も作風を変え、常に時代の寵児として賞賛を浴び続けました。

皆さんは、ピカソの絵にどのようなイメージをお持ちでしょうか。

本当に上手なの？ なんの絵なの？ よくわからない？ ……このような印象を持つ方も多いでしょう。

ピカソという名前は、世界の誰もが知っているのに、作品はそこまでは知られていない。なんとも不思議な画家です。誰でも知っている作品、しいてあげれば「ゲルニカ」くらいでしょうか。それでもピカソは天才と称される、その所以はいったい何なのでしょう。



ゲルニカ



科学と慈愛

私はふたつの理由を考えます。ひとつは、時代を先取りする“アート・プロデューサー”であったからです。ピカソは作風を何度も変えています。当時の最先端アートを発表し、流行のピークを過ぎると、そこで立ち止まらずに、また次の最先端アートを発表する……それを何度も繰り返し、見事に次々にヒットさせたのです。現代でいえば、時代を先取りした作品を発表し続ける音楽プロデューサーのようなもの。そのセンスの凄さには驚かされます。当時このような画家は、ピカソ以外に見受けられません。もうひとつは、画家としての突出した技量が大衆に認められていたことです。15才の時の作品「科学と慈愛」などを見れば、誰もが納得します。どんなに奇抜な絵を描いても、本当はアカデミックな絵もしっかり描ける画家なのだと、高く評価されていたのです。

また、多くの画家は「名画」とともにその名を遺しているのに対し、ピカソは“絵画運動の旗手”として著名な画家であることも、特筆すべきことです。しかし、私は別の疑念も持っています。一般的には「天才ピカソ」を疑う余地はないでしょうが、どうも腑に落ちないのです。というのも、「科学と慈愛」は画家で美術教師であった父親の助言のもと描かれた、とされています。画家である父親から学術的指導や助言を受けたならば、かなり精度の高い作品に仕上がるでしょう。どれほどの効果があるのか、美大受験を控えた画学生なら、

喉から手が出るほどの個人授業です。「科学と慈愛」は確かに優れた作品です。しかし、ピカソが独力で描いたと、本当に云えるでしょうか。他の絵についても然りです。私の知る限り、親元を離れてから、学生時代のデッサン力を示すような具象絵画作品を、まったく残していないのです。せめて1点でもあれば、私の疑念も晴れるのでしょうか……。



海辺の母子像（青の時代）



アビニヨンの娘たち（キュビズム）

一方で、ピカソを気の毒にも思います。なぜ具象絵画作品が1点も残されていないのでしょうか。おそらく、もうアカデミックな具象絵画は描きたくなかったのでしょう。20歳の時、バルセロナからパリに向かったピカソの心境は、現代の日本に置き換えるなら、「こどもの頃から親に無理やり受験勉強を強いられ、大学に合格するまで好きなこともできず、やっと親から解放された。もう、あんな勉強なんかしたくない、ぼくは好きなことをしたいんだ」と。「科学と慈愛」からは、自分の意志に反しながらも、英才教育に従った優等生の画風が感じ取れます。これって、天才というより、むしろ秀才ですよ。画家というものは概して、若い頃に自分が描きたい絵、好きな絵を描き、やがて生活のために、本意ならずとも絵のスタイルを変えたり、顧客からの注文によって描いたりするパターンが多く、ミレーもモネもルノワールもそのパターンです。しかし、ピカソはその逆で、独り立ちしてから自分好みの絵を描いています。画家である親に、つきっきりで指導されるのは、嬉しい反面、窮屈だったでしょう。その反動で、親元を離れてから、好きな絵を思う存分、描いた。そう考えるのが、自然な気がします。ピカソは生涯をかけて、子供らしい絵、つまり、純真無垢な絵を目指していた、とされています。しかし、本当にそうでしょうか。一度、しっかりとしたデッサン力を身につけた画家が、素朴な絵を描けなくなるくらい、当人にも分かっていたはず。ピカソの絵は、ひと目で彼の絵だと明らかにわかりますよね。はっきりとした特徴や個性が際立っていて、言い換えれば、画家たる証拠、「大人の絵」が確立されているのです。

詰まるところ、ピカソが目指していたものは「描きたいものを自由に好きに描く」ことであり、生計のための絵を描いた職業画家とは異なり、芸術家としての理想を成し遂げた数少ない画家です。

正直言うと、私は、ピカソの作品自体にはあまり興味がなく、ピカソという「人物」にたいへん興味があります。時代を先取りするアート・プロデューサーであり、絵画運動の旗手であり、常に新しいものに挑戦し続けた画家であったからです。絵画運動のフォービスムではアンリ・マティスやモーリス・ド・ヴラマンクらと、キュビズムではジョルジュ・ブラックらと活動して、長年に亘り、絶えず変貌し続けた画家です。それでも彼の根幹には、「自由に好きに描き続けた」という一貫性があるのです。

バルセロナをはじめ、スペイン、いや世界各国に、ピカソの作品を所蔵・展示している美術館がいくつもあります。美術館を訪れたなら、作品鑑賞だけでなく、ピカソの生き方や芸術に対する考え方などを感じ取ってみては、いかがでしょうか。